

第20回「保育実践研究」を募集しています。
募集要項は4月号付録です。ご覧の上、ぜひご応募下さい。

研究レポートの書き方(2)

— 保育実践課題のみつけ方と研究方法 —

「保育実践研究」企画審査委員会

1. 実践研究の重要性を園全体で認識することから

社会の変化とともに保育施設への社会的ニーズが拡大し、その役割の重要性や保育の質、保育者の専門性の高まりが期待されていることは周知のことです。また、保育所保育指針の中にも自己評価が強調され、以下のように明記されています。

第1章 総則

3 保育の計画及び評価

(4) 保育内容等の評価

ア 保育士等の自己評価

- (ア) 保育士等は、保育の計画や保育の記録を通して、自らの保育実践を振り返り、自己評価することを通して、その専門性の向上や保育実践の改善に努めなければならない。
- (イ) 保育士等による自己評価に当たっては、子どもの活動内容やその結果だけでなく、子どもの心の育ちや意欲、取り組む過程などに十分配慮するよう留意すること。
- (ウ) 保育士等は、自己評価における自らの保育実践の振り返りや職員相互の話し合い等を通じて、専門性の向上及び保育の質の向上のための課題を明確にするとともに、保育所全体の保育の内容に関する認識を深めること

つまり、日常の保育実践の中で、保育者が丁寧に子ども一人ひとりの心の育ちや意欲、取り組む過程に目を向けながら、保育計画を立て実践記録をきちんと取っていくことで自らの実践を振り返るとともに、それをもとに職員相互でよく話し合いをして課題を明確にし、共通理解していくことが、保育の向上につながっていくということです。保育者の実践研究は、まずは園全体でその重要性を確認したうえで、保育者一人ひとりが自覚を持って取り組むことが大切です。

2. 自分自身が困っていることや面白いと思えることから課題をみつける

ずいぶん前の話になってしまいますが、私が保育者になって2年目に、主任から「実践をまとめ

て研究発表をしては？」と言われました。当時の私は、日々の保育で精いっぱい、また、毎日子どもたちと楽しく過ごすために保育者になったのであり、研究なんてとてもできない…と「研究」という言葉に身構えがあって、主任に「まだ無理です。そのような余裕はありません」と答えました。今考えると冷や汗が出る思いです。

ところが、その年に初めて0歳児の担当になり、乳児の日々の成長に触れているうちに、はじめは小さくてかわいいと思っていただけだった乳児の指先や手の動きが、開いたり閉じたり、近くにあったガーゼを偶然つかんだり、自分の手をじっと見るようになってきたり…と、その発達の様子が面白くまた、感動的で、いつのまにか毎日意識して観るようになり、保育記録にも手の動きに関するものが自覚しないまま増えていました。そうしているうちに、担当していた子がおもちゃを持って遊べるようになってきました。でも、当時、園にあった乳児が持って遊ぶガラガラ類はプラスチックや木製が多く、乳児が仰向けで持って遊ぶと顔の上に落して危ないし、座位で遊んでいても、思いきり振りすぎると自分の顔を叩いてしまうこともよくあってひやひやさせられました。軽くてやわらかくて触ると音がして洗えるおもちゃがないだろうか？と考えるうちに、ポリ袋を布の中に入れて縫いこんだおもちゃを作ってみると、これが生後4か月くらいの赤ちゃんにちょうど良く、30年経った現在でも保育室で使われています。次には、指先が分化してきて小さなものをつまめるようになってきた子のために、竹筒と鈴とゴムを使っておもちゃを作ってみるととてもよく遊んでくれました。こうなってくると面白くなってきて、乳児の手の発達やおもちゃについての文献を読んだりしながら、市販のおもちゃと手作りのおもちゃについていつのまにか比較していたり、乳児のおもちゃの条件を考えたりし始めていました。そのとき、タイミングを見計らったかのように主任が「そのことをまとめれば十分な実践研究ですよ」と言ったのです。大変稚拙なものですが、これが私が保育者として初めて取り組んだ実践研究となりました。

保育実践をしていると、会合う子どもの数だけ困ったり悩んだり感動する事柄は絶えることなくあるものです。答えや結果を急がずにありのままの子ども様子を受け止めて、じっくり向かい合っていていくことが、保育指針のなかにもある子ども一人ひとりのもつ特性に応じた保育者として大事な姿勢であり、そのような過程にこそ実践していくための課題が見えてくるのです。

3. 記録の方法を工夫する

保育を振り返るためには、どうしても記録が重要になってきます。保育者は、目の前のかかわりに次々と追われ、子どもたちと共有する生活時間の中では“待ったなし”ですから、記録をとる時間を作るのはなかなか大変です。保育者間で話し合いをもち、お互いに協力しながら役割分担を工夫して、子どもたちへの対応が不誠実にならない範囲で、できる限り記録が正確に残せるような体制作りが園全体の姿勢として重要です。

そのうえで、記録の方法としてポイントをあげてみます。

- ① はじめは無理のない範囲で自分の気づいたことを記録する。
- ② 保育の合間に書き留められないようときは、写真やビデオなどで記録する。
- ③ 一日の終わりに、その時の思い出せる限りの状況を書き足しておく。その際は、なるべく事実

と自分の読み取りや感想とは書き分けるようにする。

- ④ しばらくその状態を続けていき、ある程度たまったら読み返してみる。

＊保育記録や写真、ビデオなどのその場面を切り取った行為は、その人の子どもの見方や感じ方が表れるので、この時点でかなり自分の保育を振り返ることができる。

- ⑤ 記録の中になにか共通点や疑問点が見えたり、納得できることが見えてきたら、それがテーマとなる。

- ⑥ テーマが決まったら、参考文献を探し時間をみつけて読む。

＊文献を読むことによって、観るポイントや予測をして実践に臨めるようになるので余裕が生まれる。

- ⑦ 記録の書きにくさや内容に無駄だと感じるような部分が見えてくると、記録用紙の欄の切り方、項目などが工夫できるようになる。また、何度も出てくる言葉は記号にして省略すると記録時間が短くなる。

- ⑧ 保育者間で報告し合ったり意見や感想を交換する、または園内研修などで話し合ってみる。可能であれば、研究者のアドバイスを受けてみる。

保育は、日々の生活のどの部分を切り取っても、子どもの成長発達にとって重要な意味がありま。その点からいえば、実践研究の視点は保育者自身が興味関心を持ったどの部分からでも入っていくことができ、そうすると面白く、深めやすく研究成果として得られたことは、自分の保育に対して「さらに高めたい」という気持ちを引き出してくれるものになるはず。また、保育実践を研究することは、自分の子ども観や保育観を他者にさらけ出すことになるために、多少勇気がいることですが、「開かれた保育」の本来の姿を目指す意味でも、有意義なこと。です。

4. 子どもの成長や保育の面白さに気づく実践研究

多種多様な出来事にその場で対応を迫られる保育という仕事は、とりあえず目先のことをこなすということの連続になりやすく、気がついたら1日が、1週間が、1年が過ぎていた…ということになりがち。だからといって、感覚的、感情的、そして経験的な視点だけで保育実践を行っていくとどうなるでしょうか。

“こうやると泣きやんだ” “こうしたらよく食べた” と、方法や結果のみが優先されていきます。そうになると、子ども一人ひとりとはみんな違っているはずなのですが、保育者のかかわり方がワンパターンになってきて、その形に添って活動できない子がダメな子どもにいつのまにか見えてきてしまうのです。そうすると、保育実践は大変になってきて、保育者も子どもも苦しくなり、つまらなくなってきました。子どもがみんな同じだと見えてきてしまう保育者のまなざしは、保育をパターン化させていき、深まっていけないのです。反対に、子どもがみんな違って面白く、常に変化しているから見逃せないと思っている保育者の保育は、どんどん深まっていき、多様なかかわりや工夫が生まれて、保育が楽しくなってくるのです。また実践の振り返りをする中で、自分が解っていたつもりだったことがまるで解っていなかった…あるいは、他の保育者の保育観や子ども観に触れることによって、自分だけでは気付くことができない視点を発見できたり視点を広げるきっかけ

をみつけたりします。他の保育者の保育観やその人の持ち味に気づかされることで、信頼感が強まり、連携や役割分担がスムーズになったり、勉強しようという思いが研修や研究への意欲にもつながっていくはずです。

5. 保育者間の認め合い、支え合いがよい実践研究を生む

保育者間にとどまらず、子どもたちや保護者とのコミュニケーションが豊かであればあるほど、実践研究の種を見つけるチャンスが多いとも言えると思います。しかし現実には、保育の長時間化や、多様なニーズに応じるためにパートやアルバイト待遇の保育者が多い職場など、保育者同士が自然に保育の話ができる体制になっていないところも少なくなく、あれもこれもと要求される保育者の悲鳴も聞こえてきます。それでも、子ども達の毎日は積み重なっていきます。日々の経験をつなげていって現在進行形で育っているのです。どのような立場の保育者であっても、子どもと接している以上、そのかわりに責任があることは否めません。そしてまた、短時間しか接しない保育者の立場で見える大事なこともあるかもしれません。保育実践にとって子ども一人ひとりの違いを大切にする視点が重要であるように、保育者一人ひとりの違いも認め合いながら互いに学び合える人間関係であることが、実践研究しやすく、さらに研究して得られたことが実践に生かされ、保育の質の向上につながっていく環境であると言えるでしょう。

第20回「保育実践研究」の募集

日々の保育から気づいた課題やエピソードについて考察した実践研究を募集しています。募集要項は4月号付録又は協会HPで。
締切は2025年11月10日(月)。皆様のご応募をお待ちしています。

☆ 最優秀賞：賞状、副賞10万円 優秀賞：賞状、副賞5万円 ☆

〈問合せ・応募書類送付先〉

社会福祉法人日本保育協会 企画情報部
〒102-0083 東京都千代田区麹町 1-6-2 麹町一丁目ビル 6F
TEL:03-3222-2114

※要項はこちらから（第1回～第19回までの作品も紹介しています）

<https://www.nippo.or.jp/laboratory/index2.html>